

“変ホ長調の世界” — 変ホ長調の名曲を探る —

プログラム

今日は“調性”を特集するシリーズで、変ホ長調で書かれた名曲を集めてお送りします。
モーツァルト21歳の1777年に書かれたピアノ協奏曲第9番は“ジュノム”の名で親しまれている作品で、当時の女流ピアニスト、ジュノムに献呈されたことに由来しています。第1楽章の冒頭で、すぐに独奏ピアノが登場、第2楽章は初めての短調など、巧妙な作曲技法と新鮮でスケールの大きな楽想はモーツァルトのピアノ協奏曲の名曲のひとつに数えられています。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第26番は弟子でもあったルドルフ大公がナポレオン率いるフランス軍のウィーン侵攻を受け、脱出せざるを得なくなった事への愛惜の情を描写した作品で、自ら“告別”と記しています。ショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番は1959年の作品で、作者自らが“おどけた感じの行進曲”と称した軽快な第1楽章、叙情的な第2楽章、高度な技巧を要するカデンツァを挟んで、再び軽快な終楽章で終わるといふ、ショスタコーヴィチの個性豊かな曲想が魅力的な名曲です。ショーソンの詩曲は作者の代表作というばかりでなく、ヴァイオリン曲を代表する傑作で、甘美で抒情的な旋律が朗々と歌われ、香り高い詩情に溢れています。ヴァイオリンの名手、イザイに献呈されました。ベートーヴェンの交響曲第3番はこれまでの交響曲にはなかった壮大な規模とスケール感、葬送行進曲やスケルツォの融合など、充実した書法は偉大な交響曲と呼ぶに相応しい内容を持っています。最初ナポレオンを理想の英雄と考え、献呈するつもりでいたベートーヴェンが、フランス皇帝になったナポレオンに失望し、単に「ある英雄の思い出のために」と書き換えられたというエピソードはあまりにも有名です。ごゆっくりお楽しみください。

ウォルフガング・アマテウス・モーツァルト (1756~1791) :

ピアノ協奏曲第9番変ホ長調K.271“ジュノム”～第1楽章、第2、第3楽章から

マリア・ジヨアン・ピリス (ピアノ)

ジョン・エリオット・ガーディナー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1997.1.25 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) :

ピアノ・ソナタ第26番変ホ長調op.81a“告別”～第1楽章、第2～第3楽章抜粋

ブルーノ・レオナルド・ゲルバー (ピアノ)

(1990.3.15 オーチャードホールでのLive)

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906~1975) :

チェロ協奏曲第1番変ホ長調op.107～第1楽章、第2～第4楽章抜粋

ボリス・ペルガメンシコフ (チェロ)

ホルスト・シュタイン指揮NHK交響楽団

(1987.11.18 NHKホールでのLive)

*** 休憩 ***

エルネスト・ショーソン (1855~1899) :

詩曲 (ヴァイオリンと管弦楽のための) op.25

ヴィクトル・トレチャコフ(V)

アルド・チエツカート指揮ウィーン交響楽団

(1976.5.30 ウィーン・ミュージクフェラインサールでのLive)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) :

交響曲第3番変ホ長調 op.55“英雄”～第1楽章から、第2楽章から、第4楽章

朝比奈 隆指揮ベルリン・ドイツ交響楽団 (ベルリン放送交響楽団)

(1989.9.24 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)